

モンタナの空へ



20歳のとも子さんは、アメリカ留学を目指して勉強中です。

留学先は、カナダ国境に近いモンタナ大学です。

豊かな自然に囲まれた、アメリカでも評判のキャンパスです。

障がい者の教育に力を入れている大学でもあります。

とも子さんは両眼とも全く視力がありません。

海外留学は、とも子さんの目の前に広がる大きな夢の一步です。



とも子さんは、先天性の緑内障でした。

生後2カ月で手術を受け、失明はまぬがれましたが弱視でした。

成長すると、小・中・高一貫の盲学校で学びました。

この間にも症状の悪化で手術を繰り返しました。

高校2年生の時には、完全に光を失いました。

かすかに見えていた色や形は記憶の中のものとなりました。

しかし、とも子さんはこう思いました。

「また違った世界の中での工夫が楽しめる」



とも子さんは小学生の時から今も同じ先生に英語を習っています。

家族の間では、その先生を「サリバン先生」と呼んでいます。

重複障がい克服したヘレン・ケラーの家庭教師です。

中学2年生のころ、とも子さんの視力は一段と低下しました。

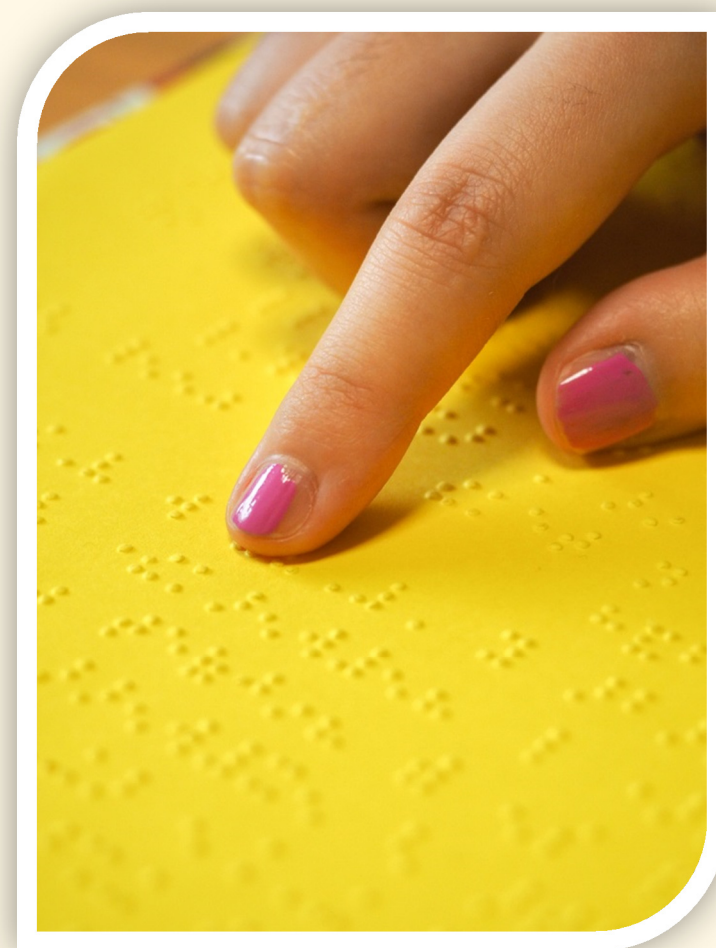
先生には伝えていませんでした。

ところがある日、先生は点字の英語を使い始めます。

点字図書を作るライトハウスに通って勉強されていたのです。

「一緒にいるだけで心が支えられます」

とも子さんは、サリバン先生に厚い信頼を寄せています。

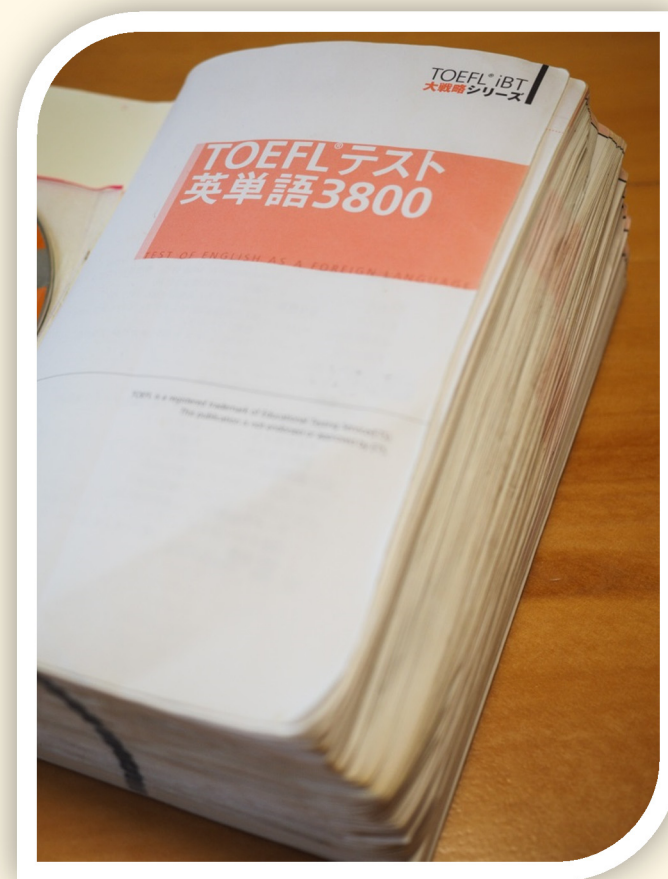


とも子さんが海外留学を決意したのは、高校3年の夏、
モンタナ大学で受けた短期語学研修がきっかけでした。
オープンで自由な空気がとても心地よく感じられました。

「アメリカで働くことができれば」「英語の先生になりたい」
そんな夢が大きく膨んだのです。

留学への関門は、英語能力試験のTOEFL（トーフル）です。
点字を貼ったとも子さんの英単語帳は、とても厚くなっています。

「ちょっとずつやればいいよ」「頑張らなくていいよ」
サリバン先生はそう優しく励ましてくれます。



年ごろのとも子さんは、ファッションが大好きです。

ワンピースにブラウス、ヒール、メイク…、目が離せません。

とも子さんは、なおさんと一緒に出掛けるショッピングを楽しみにしています。

なおさんは、盲学校を一緒に過ごした大の友人です。

なおさんは弱視ですが、一人では不自由なとも子さんを連れ立ってくれます。

「ポジティブで優しい。いつも話を聞いてくれる」と話すとも子さん。

なおさんは、同世代の目で支えてくれる心強い友人です。



アメリカのロサンゼルスに住む友人もいます。

70代のダンさんです。

奥さんは日本人で、とも子さんのおばあちゃんの友人です。

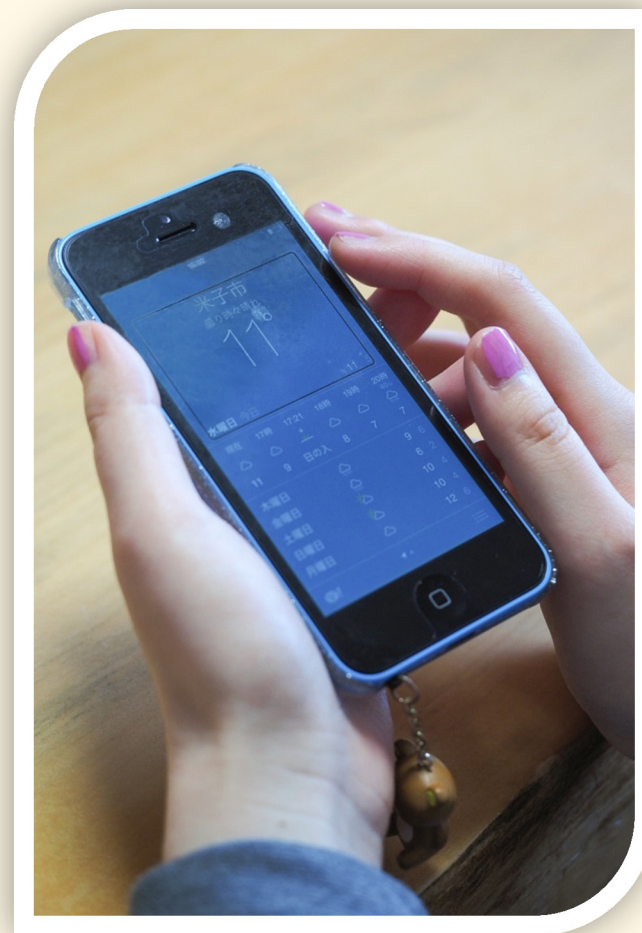
ダンさん夫婦は、とも子さんの自宅を訪ねたこともあります。

ダンさんとは毎週、インターネット電話で近況を伝え合います。

悩みごとを言うと、ダンさんはいつもこう言います。

「ライフ・イズ・アドベンチャー（人生は冒険だ）」

「とも子、何事も人生を楽しんで」



ことしの成人式に、とも子さんは振袖を着て出席しました。

「髪型にメイクと、それは注文がうるさかったですよ」とお母さんののり子さん。

家族で一緒に撮った写真には、両親に弟、おじいちゃん、おばあちゃん、

そして、にっこりとほほ笑むとも子さんの姿があります。

家族写真はモンタナに持っていく予定です。

多くの人に見守られて成人を迎えたとも子さん。

「責任の持てる生き方をしたい」と言います。

広がる青い空に浮かぶ白い雲一。

モンタナの空に向かって旅立つ日は間近でしょう。





「視覚障がい」について

なんらかの原因により視機能に障がいがあることにより、全く見えない場合と見えづらい場合とがあります。後者の場合は ▽細部が分からない ▽見える範囲が狭い ▽光がまぶしい ▽特定の色が分かりにくい—などの症状が特徴です。

★こんな配慮がうれしい！

- ◇ 白杖を使用している人が困っていたら突然体にふれず、前方から簡単な自己紹介をしてから声をかける
- ◇ 「こちら」「あちら」などの指示語は使わず、具体的に説明する
- ◇ その人の「目」になる気持ちで接する

あとがき

人が外から受け取る情報量の80%以上は目からといわれています。視力を失うことの大きさを痛感します。光を失っても、「また違った世界の中での工夫が楽しめる」。幼いときから弱視だったとはいえ、そう話すとも子さんの強さには驚かされました。海外留学のハードルは決して低くはありません。大好きというアイドル

グループの歌でエールを送りたいと思います。「胸を張れ いつでも変えられるさ」「立ち上がれ 君はひとりじゃないさ」。(か)